

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 30

出身地が違い、郷土愛などない
流民の地だった北海道に
一体感が生まれたキツカケは、
日清戦争への屯田兵出兵だった。

日清戦争と北海道

明治二十七年（一八九四）年八月一日、日清両国の間で宣戦布告がなされ、「日清戦争」が勃発。明治維新後、我が国初の対外戦争であり、この戦争以後にわかに言われ出したのが、「挙国一致」のスローガンだった。政府と野党の対立もピタリとやみ、そのパワーは挙げて外へと向けられた。

しかし、開戦と同時に北海道を覆ったのは、不景気と物価高であった。その原因は、本州―北海道間の主力定期船が徴発されたことにあった。当時、北海道の移出入はすべて船に頼ったものだったため、大打撃となったのだ。

物価も上昇の一途をたどった。同年十月から翌年三月まで、海上運賃は三割も値上がりし、道内各地の倉庫には行き場を失った農水産物がうず高く積まれていた。

漁場の親方も金繰り難に加え、働き手である漁夫の多くが軍隊に召集されたため、人集めに高い賃金が必要となり、青息吐息であった。二十八年春の道内のニシン定置網数は、例年の三分の一に激減したという。

屯田兵に動員令

そんな北海道で日清戦争の主役を務めたのが、明治二十八年三月に出征の動員令が下った屯田兵だった。

当時、屯田兵の数は二二兵村三六中隊で四千人を超えていた。この屯田兵に加え、本州で現役を終え、予備役・後備役中に北海道に移住してきた者にも動員がかかり、

新たに編成されたのが第七師団の前身となる臨時第七師団。出身地や入植地が異なる屯田兵たちを、一堂に集めた混成部隊であった。

北海道はこの動員により、戦争ムードが一挙に高まった。師団の集結地となった札幌は、兵と軍馬で賑わう軍隊の街と化し、沈んでいた経済も上向いてきた。

帰還兵を熱烈歓迎

その後、臨時第七師団は東京に移動し、そこで待機しながら出動命令を待った。師団長は屯田兵司令官・永山武四郎。彼の指揮の下、屯田兵たちは弱卒といわれぬよう訓練に励んだ。道民も我が郷土の兵士たちの動向に注目し、地元の新聞もその動きをしばしば大きく報じていた。屯田兵の士気は大いに上がった。

しかし、四月に講和条約（下関条約）が締結され、出征する前に戦争が終了。戦地

に赴くことなく、五月末に北海道に帰還することとなった。

「道民諸君に告ぐ、凱旋門起こすべし、紅旭旗翻すべし、歓迎宴開くべし」（明治二十八年五月十八日『小樽新聞』）。

屯田兵の帰還歓迎の呼びかけは、出征時以上に熱気を帯びたものとなり、帰還兵たちは道内各地で思いもかけぬ熱烈歓迎を受けた。

戦争景気

日清戦争前の日本の財政支出は約八千万円であったが、戦争の勃発で約二億円の軍事支出が生じ、膨大な金が国内に流れた。戦争の勝利による清国からの賠償金も政府に入り、国内経済は一気に膨張。北海道の経済もその恩恵に浴した。

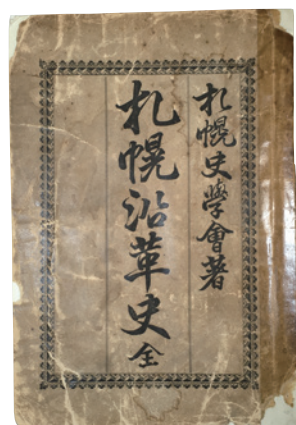
札幌麦酒株式会社などは、戦勝祝勝会によって在庫のビールが一掃され、かつてない好景気となり、戦争前には一〇万円だった

仮墓標が石碑へと変化し、

札幌初の史誌『札幌沿革史』が

出版されるなど、戦争により

郷土意識が萌芽した。



札幌史学会が発行した『札幌沿革史 全』（札幌市公文書館所蔵）

た資本金を三〇万円に増資。設備を拡張し、生産高を明治二十八年の千七百石から翌年には四千二百石まで伸ばした。

事業への意欲も高まり、札幌では戦争後に北海道木材会社、札幌精米会社、魚卸会社、北海道牧畜会社、北海道介立会社、後藤合名会社、札幌酒造合名会社などが新たに看板を掲げた。

芽生えた郷土愛

北海道民は移住当時、互いに出身地が違い、言葉・着物・生活習慣などともことごとく異なっていたため、一体感も郷土愛もなく、自分が一番と信じていた。しかし、日清戦争後には連帯感が生まれ、徐々に同質化されていった。

札幌では新年名刺交換会という新しい習慣が生まれ、墓地の仮墓標が次第に石碑へと代わっていった。明治三十年には、札幌農学校教授の新渡戸稲造を会長に、河野常吉、永田方正らを会員とする「札幌史学会」が、札幌最初の史誌『札幌沿革史』を出版した。

これらの出来事は、札幌を郷土と思う人々が定着してきたことを示していた。札幌市民だけではなく、北海道各地に住んでいる人々も、この地に永住する覚悟をし、精神的にも落ち着いた社会を築こうという雰囲気になってきたのだ。

明治二年、わずか二戸七人でスタートした札幌は、日清戦争が勃発した四半世紀後の明治二十七年、五千戸二万八千人の住民が住む街となり、北海道も「五十万道民」と呼ばれるほどにまとまりを見せるようになった。北海道民の連帯意識や新しい郷土意識の芽生えをもたらすきっかけとなった戦争、それが屯田兵が出征した日清戦争であった。



札幌駅構内における日清戦争当時の屯田兵輸送情况（札幌市公文書館所蔵『目で見る北海道史』より転載）

あつろの 杜

NHKサービスセンター札幌支局長
那須敦志さん

Interview

1970～80年代、
旭川市の「河原館」を
拠点に観客を魅了したアマ
チュア劇団「河」。高校時代に
「河」と出会い、その軌跡を
著した那須敦志さんのお
話です。

旭川の歴史との出会い

本格的に歴史に興味を持ったのは、NHK旭川放送局長の時ですね。二回目の旭川勤務だったので、再びお付き合いの始まった人がいた。その人は郷土史をやっていた、僕に旭川の古い写真を見せてくれたり、興味を惹くようなことを教えてくれたりしたんです。

僕はテレビ屋なので、「じゃあ映像にはどんなものがあるのかなあ」と思い、NHKのアーカイブスを調べてみたら、大正昭和初期や昭和三十年代・四十年代の映像がかなりあった。とりあえず一部を観てみると面白かったので、その友達にも観てもらったら、「那須さん、これはすごい。こんな映像あるなんて誰も知らないよ」と。彼が映像を手がかりに解析すると、今の旭川と古い当時の旭川が結び付くんですよ。それを一般の方々にも観てもらえば、自分たちの住んでいる旭川という場所を再確認するいい機会になるなと思います。

ふるさと旭川の 今と昔を 結びたい...



那須敦志
なす あつし

1957年旭川市生まれの生粋の旭川っ子。明治大学文学部演劇学科に入学、学生劇団「活劇工房」で舞台創りに携わる。
1982年NHKに入局。札幌放送局放送部勤務の後、記者、ニュースディレクターとして道内各放送局や東京のニュースセンターで勤務。2010年に旭川放送局長となり、4年間の在任中、地域の古い映像を紹介する試みを自ら企画し開催。その成果を2013年に『知らなかった、こんな旭川』（中西出版）にまとめる。
2014年7月から、NHKサービスセンター札幌支局長。2016年12月に『あの日たちへ』を発売。A5判258頁、本体1,500円＋税。



その映像をお観せするセミナーを始めました。二回目の旭川勤務は四年間でしたが、数十回も開催するほどの人気でした。

旭川在任中にやったほかの大きなものは「なつかしの平和通展」という企画展と、僕がいた時がちょうど常磐公園の造成が始まって百年だったので、それにちなんで行った「愛されて百年 常磐公園

の歩み展」。それと、たまたまNHK旭川放送局のブログに書き溜めていたものがあったので、一緒に働いていた人たちに、それを開局八十周年の記念誌にと勧められ、二〇一三年に「知らなかった、こんな旭川」を出版しました。

劇団「河」と「河原館」

「河」は一九五九年にできた劇団で、活動は八六年までの短い間でしたが、ものすごく光り輝いた特別な存在でした。

当初は俳優座とか文学座などのいわゆるリアリズム演劇（新劇）の影響が強かったのですが、二代目の主宰者、星野由美子さんが演出

するようになったあたりから、新劇に対するアンチテーゼとしてアングラが登場してきた。「河」の人たちもその影響を受けていくんですね。

劇団「河」の拠点が常磐公園の正門近くにあった「河原館」です。民家の土蔵を借りて劇団の稽古や公演、イベントなどに使っていた小さなスペースで、建物は今も残っています。

「河原館」は昼間、喫茶店になっており、高校三年生の時、たまたま近かったので足繁く通うようになったのですが、劇団員のお姉さんがそこでコーヒーを出していた。そのお姉さんに「今度黒テントと

いうのが常磐公園に来るんだけど、興味ある？」と聞かれたので、チケットを買って観に行きました。

黒テントの芝居は衝撃的でした。「ものすごく面白かった」とお姉さんに言うと、「今度うちの劇団でも芝居をやるから来て」と誘われ、「河原館」で観たのが「河」の人たちがやった唐十郎の芝居で、黒テントよりもさらに衝撃を受けました。大学の演劇学科に進学し、学生劇団で舞台創りに携わったのは、それに触発されたからでした。

あの日たちへ

芝居の世界にずつつと関わりた

かったのですが、NHKに入り、放送記者やディレクターの仕事をするようになったので、その思いを封印していました。しかし、「知らなかった、こんな旭川」を出版する時に、「河」がずつつと自分の原体験としてあったものから、その本にも一ページ「河」のことを書いたんです。その時、星野さんが旭川に住んでいることが分かり、お会いしに行きました。

星野さんは台本等の資料をすでに手放されていましたが、それが巡り巡って図書館にありました。見るとかなり充実した資料だったので、「河」を日本の現代劇史上特別な業績があった劇団として、きちっと位置づける本にすれば、世に出す意義があるのではないかと思います。『あの日たちへ』旭川・劇団「河」と「河原館」の20年』を書いたんです。

今年七月、三十年ぶりに「河」の公演を旭川で行います。当時やっていたオリジナルの「詩と劇に架橋する十三章」という芝居で、もう一度、それをやってみようということになりました。現代詩をセリフとして使う大胆なものです。

稽古を観に行ったんですが、大学生から八九歳の星野さんまで一緒にやっていて、なかなか感動的な光景でした。公演が楽しみです。

「重複表現」

「馬から落馬」「一番最初」のように、同じ意味を重ねてしまうものを重複表現（重言）といい、避けた表現の一つです。

「落馬」には馬という言葉が入り、「一番最初」も「最」自体に一番の意味があるので、「一番」と「最」が重複しています。「先ず最初」も同じです。

その他、使いがちな重複表現を挙げてみましょう。

「その本は年内中に発売開始です」。「年内」とは「今年のうち」ですから、「年内中」は今年のうちのうち、「発売」とは売り始めることなので、「発売開始」は売り始めることを始める、となってしまう。

「いい知らせを期待して待つ」。「期待」という言葉の中に、「すでに「待つ」という言葉が入っています。

「炎天下のもと熱戦を繰り広げていました」。「炎天下」とは「炎天のもと」ですから、炎天のもとのもと、になってしまう。

「いやあ、ひどい被害をこうむってね」。「こうむる」を漢字で書くと「被る」です。「被る害」が被害ですから、意味が重なっています。

「ハングル文字」。「ハン」が大きい・正しい、「グル」が文字という意味です。したがって、単にハングルというのが正解です。

「軽く会釈」。広辞苑では「会釈」を「軽く首を垂れて「礼すること」と説明しており、「会釈」だけで十分です。「製造メーカー」も「メーカー」で十分です。

準備は事前に行うものですから、「前もって準備する」はおかしい。まだありますよ。「余分な贅肉」「雪辱を晴らす」「断ツの一位」「過半数を超える」「思いがけないハプニング」など、「まだまだ未解決」な誤りがたくさんありますよ。

OW L I N F O R M A T I O N

松浦武四郎の碑文を語るトークイベント

北海道の名付け親、松浦武四郎の碑に刻まれたアイヌ民族を語る。
4月22日(土) 14:00～15:30
紀伊國屋書店札幌本店 1Fインナーガーデン
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル)
入場無料

北海道150年事業でキーパーソンとして名をあげられた北方探検家、松浦武四郎。1869年8月15日に太政官布告によって蝦夷地は「北海道」となりましたが、その原案となった「北加伊道」を政府に提案したのがこの人物でした。

6度にもわたり蝦夷地(北海道)を探索し、詳細な記録を残した武四郎の道程を追うように建てられた碑を求め、北海道各地やサハリンを訪ね歩いて、碑や碑文全文を記録した『新版 武四郎碑に刻まれたアイヌ民族 民族の復権をめざして』が今年1月に刊行されました。書籍の発売を記念して、著者の杉山四郎さんによるトークイベントを行います。

道なき道を辿る探査行で、土地に通じるアイヌの人々の協力で支えられ、彼らと寝食をともにして交流を深めた武四郎。その碑群から見えてくる、アイヌ民族の姿を語ります。お問い合わせは中西出版まで。



中西出版刊、B6判251頁
定価:本体1,200円+税

70～80年代、旭川での熱い舞台の記憶を札幌でも

旭川・劇団『河』と『河原館』の20年
7月1日(土)～6日(木) 10:00～19:00(最終日は18:00まで)
紀伊國屋書店札幌本店 2Fギャラリースペース
※トークショーは1日14:00～15:00 1Fインナーガーデン
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル)
入場無料

「あうるの杜」でもご紹介した旭川の劇団「河」。その軌跡を辿った『“あの日たち”へ』の刊行を契機に、旭川文学資料館で昨年12月から今年1月にかけて行われた企画展を、札幌でも開催します。会場では各公演の舞台写真やポスター、台本など、当時の貴重な資料を展示。初日には著者の那須さんなどによるトークショーも企画しており、1970～80年代に強烈な存在感で観客を魅了し、当時の在京演劇人にも注目された劇団の足跡を振り返ります。

旗揚げ以来、リアリズム劇中心だった「河」は、70年代になるとアングラ・小劇場演劇の高まりを受け、唐十郎らの作品を次々と上演。76年には在京劇団の事情で上演不能となった清水邦夫の戯曲を、作者の演出で初演しました。北海道演劇の一時代を伝える、演劇ファン必見の展示です。お問い合わせは中西出版まで。



劇団「河」の拠点「河原館」(1979年)

北海道で進化した板金建築の現在

現代板金建築
北海道鋼機デザインアワード記念誌編集委員会・編著
定価:本体2,000円+税

世界有数の積雪寒冷地である北海道で独自の発展を遂げた建築板金技術。板金を中心に鉄を使用した建築作品を対象として設立された「北海道鋼機デザインアワード」が、創立5年の成果を総括した記念誌を発行しました。

受賞作品に設計者の解説をつけた実例集をはじめ、北海道の建築板金技術史や展開の可能性を語る対話を収録。過去と現在を記録し、未来を探ることでその魅力と可能性を提起しています。



北海道鋼機デザインアワード
記念誌編集委員会
(発売元:鹿島出版会)
B5判、95頁
2017年2月刊行

毎日更新“漢方型メディア”の集大成

札幌人図鑑
福津京子・著
定価:本体1,389円+税

2012年5月の配信開始以来、札幌在住の魅力的な人物のインタビューを毎日更新してきた動画サイト“札幌人図鑑”。1000回を迎えた2015年3月までの分から、70人のお話が本になりました。

パーソナリティの福津さんが一人で出演者探しから取材・撮影、掲載までを行ってきたこの図鑑。すぐそばにいる“普通の人”が語るライフストーリーはドラマチックで、取材を続けてきた福津さん自身の軌跡のようでもあります。



北海道新聞社
四六判、232頁
2017年3月刊行

樺太の歴史を後世に伝える一冊

樺太四〇年の歴史
四〇万人の故郷
原暉之、天野尚樹・編著
定価:本体1,852円+税

北海道の北に位置するサハリン(樺太)島の北緯50度以南は、1905年から40年間日本領となり、終戦時には38万人強が暮らしていました。

戦後72年が経ち出身者や関係者が減少する今、気鋭の樺太史研究者たちが、最新の成果を踏まえて最初の樺太通史を執筆。樺太の記憶を次世代に伝承するべく、漁業や林業、炭鉱などの産業の様子、人々がどのように暮らし、終戦時に何があったかを丁寧にまとめました。



全国樺太連盟
四六判、363頁
2017年4月刊行

